

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 10 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520541

研究課題名(和文) 動詞と文法構文の習得に関する構文文法的・認知言語学的研究

研究課題名(英文) A study on the acquisition of verbs and grammatical constructions in English: from the perspective of cognitive linguistics and construction grammar

研究代表者

谷口 一美 (TANIGUCHI, KAZUMI)

京都大学・人間・環境学研究科(研究院)・准教授

研究者番号：80293992

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題の目的は、認知言語学及び構文文法の枠組みにより英語の構文・文法の獲得を調査・分析し、認知的に妥当な言語獲得モデルを提示することにある。こどもと大人の会話データベースCHILDES (MacWhinny 2000) を用いて量的研究を行うと共に、実際の使用事例から構文が段階的に形成される過程を詳細に観察し、使用基盤モデルによるアプローチの有効性を示す。本研究では英語の中間態と動詞の自他交替、移動事象表現と場所/セッティングを主語とする構文を調査対象とし、こどもの発話に見られるこれらの文法的・意味的特性を明らかにするとともに、文法獲得と事態把握に関わる認知的発達との密接な関わりを示した。

研究成果の概要(英文)：This study aims to examine the acquisition of English grammar and constructions from the theoretical viewpoint of cognitive linguistics and construction grammar, and to provide a cognitively adequate model of language acquisition. The survey employs CHILDES (MacWhinny 2000), the database of conversations between children and adults. This method enables quantitative research as well as detailed observations on the gradual emergence of children's grammar based upon actual instances of utterances, and eventually shows the efficiency of the usage-based approach to this issue. Specifically handled here are (i) middle voice and transitive-intransitive alternations, (ii) motion-event expressions and (iii) location/setting-subject constructions in English. The present study has clarified grammatical and semantic properties in children's use of these linguistics forms and suggested a significant correlation between grammar acquisition and cognitive development concerning event construal.

研究分野：認知言語学

キーワード：言語獲得 構文文法 事態把握 中間態 移動事象

1. 研究開始当初の背景

理論言語学によるこどもの言語獲得に関する研究は、生得的な普遍文法存在を前提とした生成文法のパラダイムが長きに渡り中心的であった。一方で、普遍文法という装置を仮定せず、言語使用からのボトムアップにより項構造や構文を獲得するという認知言語学・構文文法のパラダイムに基づく言語獲得研究は、2000年代に入り提唱された比較的新しい取り組みである。

こうした理論的背景のもと、研究代表者である谷口は、科学研究費基盤研究(B)・若手研究(B)により英語の中間構文を言語獲得の観点から考察する試みを展開した。中間構文のように他動詞を自動詞的に使用するエラーが習得初期にみられることは先行研究で指摘されているが、調査対象のこどもの人数が限定的であり実例も十分に示されていない。そのため谷口は、こどもと大人の会話データベースである CHILDES を使用した量的研究を行い、特に *open, move* の非対格自動詞用法を含む発話を収集し、使用基盤モデルの観点から分析を行った。その結果、他動的事態から動作主を切り離し解釈する非対格自動詞の用法を獲得する前段階として、こども自身を動作主として含意する中間態的な事態把握が先行する傾向が明らかとなった。また、こどもの発話・大人の発話共に、非対格自動詞用法の *open, move* が否定形や疑問形、使役動詞 *make* の補文など特徴的な統語形式で出現することから、Tomasello (2003) の提案する「動詞の島仮説」のように個々の動詞の用法からの一般化により構文が成立する以上に習得のプロセスとメカニズムは複合的であることが示唆された。

一方で研究分担者の深田は、*there* 構文をはじめとする英語の構文研究、出現動詞の多義性および主観性に関し認知言語学的研究を行いながら、日英語での事態把握の主観性(日本語は主観的把握、英語は客観的把握)と言語形式の関連に着目した研究を展開してきた。場所やセッティングを主語とする英語の自動詞構文の1つ、*The garden is swarming with bees.* タイプの構文に関する研究では、この構文を、事態を主観的に捉えた表現と位置づけ、客観的把握を中心とする英語においては特異的な構文であることを指摘するとともに、移動事象表現に関しては、衛星枠づけ言語の代表と言われる英語にあっても日本語と同様に移動様態を付随的要素で表す場合が存在することに注目して研究を進めてきた。その中で、英語での客観的把握と主観的把握、動詞枠づけと衛星枠づけの表現パターンに関する諸問題を習得の側面から検討する必要性を認識し、絵本の言語表現を分析対象とするなど、幼児の言語使用に関しても調査を行ってきた。

このように、認知言語学・構文文法の理論的枠組みを共有し、言語獲得に関心を持つ谷

口と深田の共同研究によって、より広範な現象を調査対象することが可能となるほか、谷口の研究課題である動詞の自他交替と、深田の研究課題である移動表現・主観性は相補性が極めて高く、両者の研究を統合することで英語の文法獲得のモデル化を妥当なものにすることが見込まれた。以上の経緯により、谷口が行ってきた CHILDES による分析手法の適用範囲を拡張させ、本共同研究を着想・計画するに至った。

2. 研究の目的

本研究課題の目的は、谷口・深田の共同研究により、英語における動詞・構文の獲得プロセスを調査し、認知言語学・構文文法の枠組みによる文法獲得研究をさらに発展させることにある。

谷口は動詞の自他交替の習得に関する研究を進展させ、中間態が非対格自動詞の習得において重要な役割を担うという仮説をさらに検証するため、関連する自他交替動詞や文法構文(中間構文、受け身文)を調査した。深田は、場所やセッティングを主語とする自動詞構文および移動事象表現の獲得を分担した。

谷口・深田がそれぞれの分担範囲を調査した後、両者の結果を総括し認知言語学・構文文法の枠組みにより理論的考察を行い、さらに発達心理学など関連分野における知見と照合させることで、認知的に妥当性の高い獲得モデルの構築に寄与することを研究全体の目的とした。

3. 研究の方法

本研究課題は、こどもと大人の会話データベースである CHILDES (MacWhinny 2000) を使用し、英語母語話者の発話を収集し量的研究を行うと共に、実際の会話のコンテキストを参照し検討する質的研究を行い、使用基盤モデルの観点から事例を中心とした実証的研究を行った。

4. 研究成果

(1) 自他交替と中間態、*get-passive* [谷口]

英語では非対格自動詞が他動詞と同形であり自他交替に形態統語的マーカーを伴わないため、この交替の習得はこどもにとって容易ではない。特に、動作主という際立つ参与者をスコープから外し、典型的には非生物であるモノを焦点化する非対格自動詞の事態解釈を行うためには、こども自身を動作主とし、行為の対象となるモノがこどもの意図する行為を阻止する(“This doesn’t open”など)といった中間態的な事態解釈が介在する可能性が Budwig et al. (2001) で示唆されており、実際に谷口による量的研究でもその傾向が確認された。このことから本研究課題では「英語の中間態が自他交替の習得において

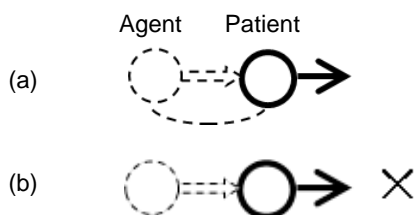
は重要な機能を担う」と想定し、中間態がこどもの言語獲得過程においてどのように出現するかを調査した。

特に本研究課題では、英語の中間態に中間構文・非対格自動詞・*get-passive* の3つの形式が認められるという Alexiadou (2012) の主張を受け、*get-passive* の習得を主に扱うこととした。実際に、受動態の習得に関する先行研究 (Budwig (1990), Slobin (1994)) では *get-passive* が *be-passive* に先行して習得されることが指摘されており、中間態が他動詞から非対格自動詞への交替のみならず、能動態から受動態への媒介となる可能性が示唆される。

なお *get-passive* には、以下のような文法的・意味的特性が先行研究で指摘されている。

- (i) *get-passive* の主語は、*be-passive* の主語とは異なり、記述される出来事の生起に対し責任を負うとされる。
- (ii) *get-passive* は主語が悪影響を被ることを意味する傾向が強い。(例: *get hit, get hurt, get killed*)
- (iii) *get-passive* では動作主を *by* 句で表示することが限定的である。
- (iv) *get-passive* は、非対格自動詞用法を持たない他動詞の自動詞用法として機能する。(例: *get dressed*)

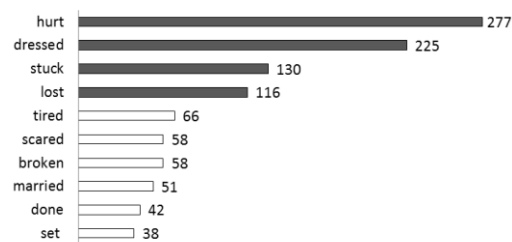
これらの特性から、*get-passive* の表す事態概念として次の2通りを想定した。図1(a)は *get dressed* のような自動詞的用法であり、動作主と被動作主が一致するという点で「再帰用法」と呼ぶ。図1(b)は、被動作主が動作主からのほたらきかけにより悪影響を被る「被害用法」である。いずれも動作主を背景化し被動作主を焦点化しており、*get-passive* が中間態であることを示している。



【図1】

以上の特徴づけをふまえ、CHILDES からアメリカの英語母語話者のこどもと大人の会話データを用い *get-passive* の発話を収集し、調査・分析した結果を以下に示す。

①大人の発話で *get-passive* を含む発話は2033件観察された。共起する過去分詞は268種類見られたが、それらの使用頻度には図2のような分布が見られた。特に生起の多い過去分詞である *hurt, dressed, stuck, lost* の4つを選択し発話数を合計すると、これら4つで全体の36.8%を占めており、顕著な「インプットの偏り」を示す。これらの過去分詞を用いた *get-*

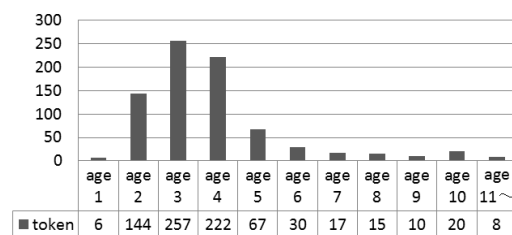


【図2】

passive は、図1の再帰用法・被害用法の双方を含んでおり、質的に均衡のとれたものである。このように、大人の発話は量的にも質的にも、こどもの *get-passive* の習得を促進するよう機能するものであることが分かる。

また、大人の発話に *get broken* が58件含まれている点も注目に値する。*Get broken* は意味機能的に非対格自動詞 *break* と等価であり、アメリカ現代英語コーパス(COCA)での *get broken* の事例は15件に限られたことから、*get broken* の高頻度の使用は大人がこどもに話す場合の特徴であると言える。

②こどものデータについて、*get-passive* を含む発話数を年齢別に示したのが図3である。*Get-passive* の使用数は3歳~4歳がピークであり、その後は減少することが分かる。



【図3】

これらについても、共起する過去分詞の種類と発話数について年齢別に調査した。紙面の都合上、3件以上観察された過去分詞について列挙する(括弧内は発話数)。

- (1) 2歳: hurt (32), stuck (14), **broken** (8), dressed (8), lost (7), tired (7), scared (6), caught (5), crunched (5), done (5), fixed (3), glued (3), killed (3), rained (3), set (3)
- 3歳: hurt (34); lost (26); dressed (15); set (15); killed (12); **broken** (11), caught (11); stuck (10); tired (8); eaten (7); scared (7); burned (5); fixed (5); married (5); saved (4); spoiled (4); trapped (4); bent (3); knocked (3); shot (3)
- 4歳: killed (23); hurt (16); dressed (11); married (11); shot (10); caught (9); lost (9); stuck (9); **broken** (7); mixed up (6); tired (6); run over (5); scared (5); burned (4); buried (3); eaten (3); set (3); tangled (3)
- 5歳: set (10); hurt (8); mixed up (5); hit (4); killed (3); lost (3)
- 6歳: stuck (8); caught (7); lost (5); done (4);

married (4); paid (4); shot (4); hit (3); killed (3); scared (3)

2~3 歳の段階では特定の過去分詞の頻度が高く、年齢が上がるにつれ、語彙量の増加等の要因もあり、多様な過去分詞を使用するようになることが分かる (3 歳の標準偏差 5.52 に対し、6 歳以降の標準偏差 1.45)。このことは、3 歳ごろまでは特定の語彙を中心とした item-based の状態であり、次第に [get + p.p.] という get-passive 構文を獲得していくという構文文法による説明が可能である。

③ こどもの発話と大人の発話にも興味深い相関が見られる。(1) で挙げた過去分詞のうち、下線は大人の発話で高頻度のもの (*hurt, dressed, stuck, lost*) であるが、2 歳から 3 歳のこどももこれらの過去分詞を高頻度で用いており、大人からのインプットを直接的に反映する“conservative learners”の段階であることを裏づけている。こうした大人に特有のインプットは、文法・構文の次元でも“motherese” (母親語) が存在し、それによってこどもが特定の形式を習得することを促進している可能性がある。

さらに注目したいのは *get broken* の使用状況であり、2~4 歳では比較的頻繁に使用されているが、5 歳以降での出現は観察されない。このことから、5 歳頃に非対格自動詞用法の *break* が獲得され迂言的用法の *get broken* に取って代わる可能性が考えられる。非対格自動詞用法と *get-passive* の習得の相関については今後より詳細な調査が必要である。

(2) 場所やセッティングと移動事象 [深田]

本研究課題では、<いま・ここ> をキーワードに、英語における事態把握の主観性 (ないしは客観性) の諸問題を習得の側面から検討する一つの試みとして、CHILDES から、場所やセッティングを主語とする自動詞構文と移動事象表現における動詞枠づけと衛星枠づけの表現パターンのそれぞれに関するアメリカの英語母語話者のこども (と大人) の発話データを収集し、これを主な分析対象として研究を行った。以下は、その結果である。

① 場所やセッティングを主語とする英語の自動詞構文の習得に関して明らかになったのは、主に次の 3 点である。(i) *The garden is swarming with bees.* タイプの自動詞構文は、こどもの自然な発話では見られず、こどもと会話する大人の発話にも見られない。(ii) 絵本では、例文(2)に示すように、*The garden is swarming with bees.* タイプの自動詞構文が現れる。(iii) 場所やセッティングを主語とする自動詞構文の中でも、*there* 構文はこどもの発話において比較的早い段階から見られる。特に“*There's something ~*”形式は、その存在が

分かっているものの、具体的・明示的に指示できないモノの存在を語るために、こどもと大人の双方が用いる。

(2) ...grew until his ceiling hung with vines and ...
(Maurice Sendak, *Where the Wild Things Are*)

この結果は、こどもが場所やセッティングよりも、こども自身の知覚や行為の対象となるモノに注目し、それを主語で表すことのほうが圧倒的に多いという事実と整合する。熊谷 (2006)によると、1 歳半頃までのこどもの活動は<いま・ここ>に収まっているが、3 歳頃には出来事を時間軸に沿って追跡できるようになり、4 歳半頃には<いま・ここ>から離れ仮想的な<いま・ここ>を設定し事態を語ることが出来るようになる、ということであるが、この知見を重視するならば、4 歳半以前のこどもは、たとえ知覚や行為の対象を主語とする構文を用いていたとしても、認知的には<いま・ここ>の中にとどまったまま、その事態を主観的・主体的に捉えている可能性が高いと考えられる。これは、4 歳半以前の段階においては、言語表現に反映される事態認知とこどもの事態認知とが必ずしも一致してはいないこと、また、英語を獲得する過程で認知発達のにも<いま・ここ>の外に視座を移すことができるようになり、言葉と認知とが一致するようになることを示唆している。言葉と認知とが一致するようになることを示唆している。言葉と認知のずれ (及び一致) に関しては、発達心理学的な観点も含めて、今後より詳細な調査・検討が必要である。

② 英語の移動事象表現の獲得過程に関しては、Mandler (2005), Clark (2003), Özçalışkan (2009), 松本(2011), 熊谷(2006)などの先行研究果および Tomasello (1999)の提唱する構文習得過程に基づき、表 1 のような獲得過程を仮定して調査を行った。

~1歳半頃: 経路ないしは移動それ自体を動詞に語彙化する移動事象表現の発現
↓
(2歳頃~: 様態への注目と様態動詞の習得)
↓
3歳頃: 様態を動詞に語彙化し、経路を付随要素で表す英語の移動事象表現の習得

【表 1】

本研究課題では様態動詞 *run* と、*come/go* を用いた移動事象表現に焦点を絞り、以下の 3 つの予測を立てて、CHILDES から収集したこどもの発話事例を分析した。

予測 1 : Özçalışkan (2009)の研究から、様態を主動詞、経路を付随要素で表すという英語に特有の移動の表現形式が 3 歳頃には獲得されていることが示唆されるが、3 歳以前の段階では *go* や *come* を主動詞、様態を付

随要素としたパターン（例えば *go running* など）が見られる。

- 予測2： こどもは1歳半頃に自分のいる<いま・ここ>の範囲外まで対象物を追跡することが出来るようになるが、4歳半頃までは自分の<いま・ここ>から視座を移すことができない点を考慮すると、それ以前のこどもの発話は「何かが<ここ>からどこかに移動する」ことが中心となり、「どこかからどこかに移動する」「どこかから<ここ>に移動する」というパターンは見られない。
- 予測3： 言語習得の初期段階から用いられる様態動詞 *run* における経路句数の増加は、典型的な英語の移動事象表現の習得に深く関与している。

予測1に関し、*go/come* を主動詞、*run* を付随要素とする *GO running/GO run*, *COME running/COME run* の事例数を調査した。その結果、前者は31例（1;7歳～3;7歳）、後者は *COME running* のみであったが13例（2;8歳～10;0歳）の事例が得られた。

- (3) a. I go running with daddy. [2;4]
b. let's go running. [2;7]
- (4) a. go run [1;7]
b. I go run up. [2;1]
c. let's go run. [3;1]
d. I going run with the shell. [3;1]
- (5) and a big storm came running up. [2;8]

アメリカ現代英語コーパス(COCA)による *V-running* に関する検索結果と照合すると、*GO running/GO run* はこどもの発話に特徴的に見られる形式である一方で *COME running* は、松本 (2011)の指摘通り、移動物が自分のほうに近づいてくる場合ないしは移動物が自分に声をかけながら移動する場合に用いられ、大人の発話でも自然に用いられることが明らかになった。また、*GO running/GO run* に注目すると、現在形と進行形 (*go {run/running}*, *going run*) が多く、移動物はこども自身かこどもが注目しているモノであったことから、この形式が、こども自身あるいはこどもが注目するモノの<ここ>から別の場所へ近未来の移動ないしは移動の予定や意志を表す表現として用いられていることが分かった。

興味深いことに、*GO running/GO run* が4歳頃に消滅するのに対し、*COME running* は3歳頃からむしろ出現する。この観察結果を Özaliskan (2009), Tomasello (1999)を踏まえて考察すると、通常の移動事象に関しては様態動詞を主動詞、自分の<いま・ここ>内へのモノの移動に関しては *come* を主動詞とするという表現パターンが3歳頃までに習得されると考えられる。またこの事実は、<いま・ここ>という自分のテリトリー内に何かが入ってくる場合には移動の経路が、また、<いま・ここ>に存在していたモノがその外へと移動

する場合には移動の様態が、それぞれ注意の焦点となることを示唆している。

GO running/GO run の出現が1;7歳～3;7歳、*COME running* の出現が2;8歳以降という観察結果は、さらに予測2も一部支持すると考えられるが、加えて予測2は、こどもの *RUN+* 経路句の事例の中でも、<ここ>からどこかに移動することを表す *RUN away* の初出が1;11歳と早く、かつ、その事例数は他の *RUN+* 経路句の事例数よりも圧倒的に多い (*RUN away*:180例、*RUN out*:77例、*RUN in*:44例、*RUN into*:14例) という事実からも支持される。

さらに、予測3の検証のため *RUN away* と *RUN to* を中心に経路句を2つ以上伴う事例を調査した結果、*RUN away* では2;4歳から、*RUN to* では2;8歳からこの種の事例が見られた。この事実を、Tomasello (1999)が示した言語習得の過程や、3歳の時点で各言語の語彙化のパターンに沿った言語表現を用いることができるようになるという Özaliskan (2009)の主張と合わせて考察すると、*run* を主動詞、経路を付随要素とする「動詞の島」の習得がまずあり、その後、典型的な英語の移動事象表現の形式 [主語(移動物)+動詞(様態)+付随要素(経路) (+付随要素(経路) +...)] が習得されると想定される。この点に関しては、他の様態動詞の事例も含めて、さらなる調査が必要である。

(3) 研究の総括

(1) 及び(2) で述べた谷口・深田による調査は認知言語学的アプローチによる言獲得研究の先駆的なケーススタディと位置づけられ、実際の発話事例を詳細に観察することにより動詞・構文の習得の段階性を捉えており、言語獲得研究における使用基盤モデルの重要性を示すものであると言える。

英語の動詞を中心とする言語(文法)獲得に関して、特に以下の点が明らかとなった。こどもの文法には大人の文法とは異なる特性が見られることは知られているが、その特性は認知言語学・構文文法の観点から動機づけを与えることができるものである。谷口の調査対象である中間態は、他動詞から非対格自動詞を習得する前段階として利用されている可能性があり、他動的事態から動作主を背景化させ中間態的な事態把握を経て、非対格自動詞のように動作主を完全にスコープから外す事態把握を行えるようになるものと想定される。この点は、深田による移動事象表現と主観性の研究成果とも関連しており、こどもの事態認知における<いま・ここ>性が、動詞の用法や構文の獲得にも密接に関わることを示唆している。そのほか、*get-passive* が非能格自動詞の過去分詞と共に起る過剰生成 ("I got rained" など)、*go run* といった移動事象表現の事例からは、こどもの文法において *get* や *go* といった基本動詞がテンスやアスペクトなどの文法標識とし

でも利用されている可能性を示しており、今後も継続して調査を行っていききたい。

<引用文献>

- Alexiadou, A. (2012) "Noncanonical passives revisited: Parameters of nonactive Voice," *Linguistics* 50-6, 1079-1110.
- Budwig, N. (1990) "The linguistic marking of non-prototypical agency: An exploration into children's use of passives," *Linguistics* 12, 21-52.
- Budwig, N., S. Stein and C. O'Brien (2001) "Non-agent subjects in early child language: A crosslinguistic comparison," in K. Nelson et al. (eds.), 49-67. Erlbaum.
- Clark, E. V. (2003) *First Language Acquisition*. Cambridge University Press.
- 熊谷高幸. (2006) 『自閉症 私とあなたが成り立つまで』. ミネルヴァ書房
- MacWhinny, B. (2000) *The CHILDES Project: Tools for analyzing talk*, 3rd ed. Vol.2. The Database. LEA.
- Mandler, J. M. (2005) "How to build a baby III," in B. Hampe (ed), 137-164. Mouton de Gruyter.
- 松本曜. (2011) 「日英語話者はいつ直示動詞を使うか：直示性の言語化に関する実験研究」 *Conference Handbook (The English Linguistic Society of Japan)* 29, 9-12.
- Özçalışkan, Ş. (2009) "Learning to talk about spatial motion in language-specific ways," in J. Guo et al. (eds.), 263-276. Psychology Press.
- Slobin, D. I. (1981) "The origins of grammatical encoding of events," in W. Deutsch (ed.), 185-200. Academic Press.
- Tomasello, M. (1999) *The Cultural Origins of Human Cognition*. Harvard University Press.
- Tomasello, M. (2003) *Constructing a Language: A Usage-Based Theory of Language Acquisition*. Harvard University Press.

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計3件)

- 谷口一美 「構文文法の理論的展開とその適用：英語の中間構文を例に」 『日本認知言語学会論文集』 12, pp. 483-495. (2012)
- 谷口一美 「英語の中間態再考：事態概念と言語習得の観点から」 *JELS* 31, pp. 200-206. (2014)
- Taniguchi, Kazumi "A Usage-based Account of the Acquisition of English *Get*-passives" 『言語科学論集』 20, pp.101-114. (2015)

[学会発表] (計7件)

- 谷口一美 「ことばの発達とことばの発達：認知言語学からみた言語習得」 金沢大学英文学会 60周年記念総会 (招待講演), 金沢歌舞伎座, 2012年11月17日.
- 深田智 「視座と〈見え〉から Hemingway 作品

に迫る」日本語用論学会第15回年次大会ワークショップ「Hemingway 作品を読み解く」大阪学院大学, 2012年12月1日.

谷口一美 「英語の中間態再考：事態概念と言語習得の観点から」 (招聘発表) 日本英語学会第31回大会, 福岡大学, 2013年11月9日.

Fukada, Chie "Entering the Imaginary World of Picture Books: How Words and Pictures Affect the Reader's Viewpoint" Paper presented at the 12th International Cognitive Linguistics Conference, University of Alberta, Edmonton, Canada, June 23-28, 2013.

Taniguchi, Kazumi "On the functions of middle voice and English *get*-passives in acquisition," Paper presented at the 8th International Conference on Construction Grammar, Osnabrück University, Germany, September 3-6, 2014.

谷口一美 「動詞の用法の獲得とインプットとの相関に関する観察」日本認知言語学会第15回大会ワークショップ「言語獲得とことばの発達」(ワークショップ代表を兼ねる)、慶應義塾大学, 2014年9月20日.

深田智 「英語の移動事象表現の習得をめぐって」日本認知言語学会第15回大会ワークショップ「言語獲得とことばの発達」慶應義塾大学, 2014年9月20日.

[図書] (計4件)

谷口一美 (畠山雄二編) 『日英語の構文研究から探る理論言語学の可能性』(分担執筆：第14章「補語をとる連結的知覚動詞：構文の変化と成立」) 開拓社 (2012)

深田智 (児玉一宏・小山哲春編) 『言語の創発と身体性：山梨正明教授退官記念論文集』(分担執筆：「絵本に見られる移動表現：言語習得との関連で」) ひつじ書房. (2012)

深田智 (篠原和子・宇野良子編) 『オノマトペの射程—近づく音と意味』(分担執筆：「絵本の中のオノマトペ」) ひつじ書房. (2013)

谷口一美 (畠山雄二編) 『ことばの本質に迫る理論言語学』(分担執筆：第2章「認知文法」) くろしお出版. (2013)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

谷口 一美 (TANIGUCHI, Kazumi)
京都大学大学院 人間・環境学研究科
准教授
研究者番号：80293992

(2) 研究分担者

深田 智 (FUKADA, Chie)
京都工芸繊維大学 基盤科学系 准教授
研究者番号：70340891